

## 愛玩鳥を始めとした動物におけるクラミジア感染症の調査研究

研究分担者 福士 秀人 岐阜大学 応用生物科学部 教授  
研究協力者 佐々 悠木子 東京農工大学 農学研究院 動物生命科学部門  
研究協力者 宇根 有美 岡山理科大学 獣医学部

**研究要旨：** 愛玩鳥を含め動物におけるクラミジアの保有状況を調査した。輸入鳥類の糞便20検体からクラミジア遺伝子は検出されなかった。結膜炎を呈した輸入モルモットの結膜15検体中14検体からモルモットクラミジア (*Chlamydia caviae*) 遺伝子が検出された。野外猫結膜71検体からクラミジア遺伝子は検出されなかった。愛玩鳥のみならず愛玩動物についてクラミジア症の感染源としてのリスク評価が必要であると考えられた。

### A. 研究目的

これまでの調査研究により、愛玩鳥及び愛玩動物（ネコ）におけるクラミジア感染症のリスクは継続していることが明らかとなった。このリスクの認識に基づいた対策を行い、その効果を検証するために、愛玩鳥、伴侶動物及び野鳥における病原性クラミジアの保有状況を継続的に調査し、動物飼育者におけるリスク評価を行う。併せて、オウム病クラミジアの検出やオウム病の診断における問題も明らかになったことから、迅速簡易診断法及び予防法に関する基礎的研究を行い、愛玩動物飼育におけるリスク低減に向けた取り組みの基盤形成を行う。

### B. 研究方法

1. 愛玩鳥、伴侶動物及び野鳥における病原性クラミジアの保有状況調査： 輸入鳥糞便検体20検体（ニュージーランド由来鳥15検体、セネガルパロット5検体）、モルモット結膜スワブ検体15検体、野外猫結膜スワブ（愛媛県青島）71検体からDNAを抽出し、PCRによりクラミジアの検出を行った。増幅産物の塩基配列を解読し、同定を行った。

（倫理面への配慮）

鳥類の糞便採取において侵襲はなく、適切な採取を行った。結膜スワブは低侵襲性の条件下で採取された。

### C. 研究結果

1. 愛玩鳥、伴侶動物及び野鳥における病原性クラミジアの保有状況調査： 輸入鳥糞便検体からクラミジア遺伝子は検出されなかった。モルモット結膜スワブ14検体からクラミジア遺伝子が検出された。塩基配列解読により *Chlamydia caviae* であることがわかった。野外猫の結膜スワブからはクラミジア遺伝子は検出されなかった。

### D. 考察

輸入愛玩鳥についてはクラミジア遺伝子は検出されなかったが、検査検体数が少ないため、クラミジア保有率が低下しているかどうかは判断できない。現在、COVID-19の影響もあり、鳥類の輸入数が減少しているとの連絡を受けた。今後、検体数の確保について検討が必要となっている。

クラミジア検出に供したモルモットの死亡原因は宇根教授らの検討によりサルモネラ症と診断された。しかしながら、異常を示したほぼ全ての個体から *C. caviae* が検出されたこと、目脂を初発として死亡する個体が現れたことから、サルモネラ症の誘因および増悪因子となっていた可能性がある。*C. caviae* は人獣共通感染病原体である可能性が示されている。我が国のモルモットにおける *C. caviae* の保有状況は明らかではないが、今後、モルモットの輸入や飼育において注意する必要がある。

野外猫の検体は重度の結膜炎とされた検体であったが、クラミジアは検出されなかった。症状の進行によりクラミジア遺伝子が検出されなかった可能性がある。

全体として研究材料の確保が次年度以降の課題となった。

### E. 結論

輸入愛玩鳥からクラミジアは検出されなかったが、引き続き調査を行い、感染源としてのリスクを評価する必要がある。ペット用モルモットがクラミジアを保有していることから、飼育者への注意喚起が必要である。

### G. 研究発表等

1. 論文発表等  
なし。

2. 学会発表等

（1）福士秀人、宇根有美. ペット用モルモットの眼クラミジア症. 第21回人と動物の共通感染症研究会学術集会, 2021年, Web.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録

- なし
3. その他  
なし